

# 望ましい学級経営の具現化につながる 学級通信の一考察

長期研修員 成井 信之

Narii Nobuyuki

## 要 旨

学級経営に悩み苦しむ学級担任の姿が多く見受けられる現在、学校教育において望ましい学級経営の具現化は大きな課題となっている。そこで、望ましい学級経営の具現化につながる学級集団育成の課題と要点を考察した。さらに、学級集団育成に大きく寄与する学級通信の役割と作成の視点を明らかにし、学級通信作成の手引きを提案した。学級通信は、児童や保護者と教員との信頼関係を築くパイプ役となり、児童理解を一層深めたり、支持的な学級風土を醸成したりすることにつながる有効な手段である。

キーワード： 学級経営、学級集団、学級通信、学級通信作成の手引き

## 1 はじめに

「学級経営とは、教師が学級集団のもつ学習集団と生活集団の2つの側面を統合し、児童生徒が、学校教育のカリキュラムを通して獲得される教育課題と、人間としての発達上の課題である発達課題を、統合的に達成できるように計画・運営することである。」(河村、2010)とあるように、学級担任は、知識の習得や、学力、技能の向上を図る「学習指導」とともに、豊かな人間性、社会性を育成する「生徒指導」の両輪で学級経営を進めていくものと考えられる。

学級集団というまとまりを基本単位として、小学校の学級担任は、学級集団の育成・維持と学級の児童に関する全ての指導・援助に取り組んでいる。今、望ましい学級経営の具現化が困難な状況にあることが、差し迫った課題となっている。「望ましい学級経営」とは、学習指導における目標と生徒指導における目標とが達成できるように、計画・運営がスムーズに行われている状態と考え、その手立ての一つとして学級通信を取り上げる。

## 2 研究目的

望ましい学級経営の具現化につながる学級通信の役割と作成の視点を明らかにし、学級通信作成の手引きを提案する。

## 3 研究方法

- (1) 学級経営における学級集団育成の課題と要点の考察
- (2) 学級集団育成の要点と学級通信の役割との関連の考察
- (3) 望ましい学級経営の具現化につながる学級通信作成の視点の明確化

#### (4) 学級通信作成の手引き「学級通信作成マニュアル 急がば回れ」の提案

### 4 研究内容

#### (1) 学級経営における学級集団育成の課題

今日、少子化傾向をはじめ、ものの考え方、価値観、行動の仕方の多様化等、社会や家庭生活の変化の影響もあり、児童や保護者の実態が以前と変化している。その変化に十分対応できず、学級経営に悩み苦しむ学級担任の姿が多く見られる。学級経営が具体的に展開される学級集団の育成が進まず、学力向上も社会性の育成も効果が上がらない現状がある。これらのことは、現在の教員の悩みとして、75%が保護者への対応が難しくなっており、51.1%が学級をまとめることが困難で、26.4%が子どもを集団として掌握できないという教員の悩みについての調査で報告されている。そこでは経験年数にほとんど差異はない。(モノグラフ・小学生ナウ、1999) また、全国連合小学校長会が実態調査を行った結果として、「学級崩壊の実態も、『集団教育が成立しない状況が一定期間続き、担任では解決できない状態』と定義し、調査した結果、468校1133学級中、81校152学級が「崩壊」していた。児童が教師の指示を無視するケースが大半だった」(世界日報、2005・5・30)と報じられた。さらに、『中央教育審議会(答申)』(1998)や『小学校学習指導要領』(2008)でも、学校現場の問題の基底に子どもたちの基本的な生活習慣、規範意識の問題があると指摘しており、子ども同士の対人関係形成の必要性、学級経営の充実の必要性を言及している。

これらの現状について、河村(2010)は、『日本の学級集団と学級経営』において、「いろいろな教育施策が、日本の学校教育の基本システムへの検討がないままに積み上げられる形で実施され、徐々に学校現場の教師たちのキャパシティを上回り、教師たちが慢性疲労の状態になってきて」おり、「日本の学校教育の基本システム、学級集団制度と、それを成立させる学習指導と生徒指導を教師が統合して行っていくという指導体制が揺らいでいる」と論述している。

また、杉田(2011)は、「悩み、苦しむ学級担任」の姿を次のように指摘している。

- ・ 望ましい集団のイメージが持てない。
- ・ 協同的な学び合いが成立させられない。
- ・ 保護者とよい関係をつくることできない。
- ・ 授業の指導に比べ、集団の指導の仕方がよくわからない。
- ・ 特別な支援を要する子どもたちへの指導がうまくいかない。
- ・ 指示が通らず、規律が確立できない。

人間は人と人との関係の中で成長するものであり、特に小学校においては、児童同士の好ましい人間関係や児童と教員の信頼関係の構築、そして、児童が生き生きと自己実現を目指して活動できる学級集団の育成があつてこそ、望ましい学級経営の具現化が可能となる。

#### (2) 学級経営における学級集団育成の要点

河村(2010)は、「どんなにいい教育計画や教材があつたとしても、それが展開される基本単位である学級集団が教育的な状態を有していなければ、教育効果は上がらないばかりか、逆にさまざまな問題が噴出してしまふ」と述べている。学級集団は、年度当初、同年齢の児童によって便宜的、機械的に組織された、最低1年間固定される公式集団である。学級集団の育成における課題は、異なる環境で育ち、様々な願いや欲求をもった児童を、知識や技能の獲得を目指す学習集団へと、学級生活を通して行われる人格形成を促す生活集団へと高め

ていくことである。

以下、学級経営における学級集団育成の要点をまとめる。

はじめに、学級経営と生徒指導との関連については、『小学校学習指導要領』において、「日ごろから学級経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深め、生徒指導の充実を図ること。」(第1章第4の2(3))とある。これを踏まえて、『小学校学習指導要領解説総則編』から、学級集団を成立させるための要点は以下の5点にまとめられる。

- ・ 学級経営の全体的な構想を立てる。
- ・ 確かな児童理解によって信頼関係を築く。
- ・ 学級を一人一人の児童にとって存在感を実感できる場としてつくりあげる。
- ・ 分かる喜びや学ぶ意義を実感できる授業を展開する。
- ・ 家庭や地域社会及び学校教職員と連携し、開かれた学級経営の実現を目指す。

次に、『小学校学習指導要領解説特別活動編』には、望ましい集団活動の一般的な条件が6点示されている。

ア 活動の目標を全員でつくり、その目標について全員が共通の理解をもっていること。

イ 活動の目標を達成するための方法や手段などを全員で考え、話し合い、それを協力して実践できること。

ウ 一人一人が役割を分担し、その役割を全員が共通に理解し、自分の役割や責任を果たすとともに、活動の目標について振り返り、生かすことができること。

エ 一人一人の自発的な思いや願いが尊重され、互いの心理的な結び付きが強いこと。

オ 成員相互の間に所属感や所属意識、連帯感や連帯意識があること。

カ 集団の中で、互いのよさを認め合うことができ、自由な意見交換や相互の関係が助長されるようになっていること。

遠藤(2011)は、この望ましい集団の一般的な条件を取り上げ、「まさにこの条件を満たしている学級がよい学級です。学級の目標を共有化していて、その実現のために建設的に話し合え、一人一人に居場所があり役割を果たしている。互いの思いが否定されず、所属感や連帯感があり、よさを認め合って生活や学習ができるような集団です。」と述べている。

また、河村(2010)は「望ましい学級集団の要素」として「集団内の規律、共有された行動様式」と「集団内での子ども同士の良好な人間関係、役割交流だけでなく、感情交流や内面的なかかわりを含んだ親和的な人間関係」の2点を「最低限の必要条件」に挙げている。

以上のことから、集団を育成するという観点で要点をしばっていくと、学級経営の全体的な構想(学級経営方針)、確かな児童理解(児童理解)、存在感を実感できる場(支持的な学級風土)、開かれた学級経営(家庭との連携)に注目できる。本研究では、以下の4点に焦点を当てて取り組むことが、学級集団育成の要点と考える。

#### **ア 明確な学級経営方針をもち児童・保護者の理解を得る**

明確な目的や方法を示さない学級担任に、児童は信頼を寄せられないし、保護者も大切な子どもを任せてはくれない。学級集団の育成には、学級経営の全体的な構想となる学級経営方針を明確にもつことが必要である。

学校教育目標の実現に向けた学級経営方針を設定し、その方針について児童や保護者と共通理解を図り、協力して取り組もうとする方向へ進めていくのが学級担任の役割である。児

童、保護者、教員のエネルギーのベクトルを一つの方向に向けられれば、学習面や生活面について共に協力していく原動力になり、学級集団の育成が一層推進されることにつながる。

#### **イ 確かな児童理解により信頼関係を築く**

学級集団の育成には児童理解が欠かせない。児童の健やかな成長を願い、一人一人が違った存在であるという認識にたった児童理解に努め、それぞれの個性・能力を最大限に伸ばすよう指導・支援するのが学級担任の役割である。

児童理解は、児童を温かく、肯定的に理解しようとする教員と児童の信頼関係を築く中で深まる。児童の発達傾向や個と集団の関係を多角的にとらえながら、人間関係の調整と発展を図ることで、学級集団を育成していくことができる。学級集団育成の第一歩は、学級担任の児童理解にある。

#### **ウ 自己存在感を実感できる支持的な学級風土をつくる**

学級担任の行う教育の営みは、学級集団の状況によって大きく成果が変わってしまう。学級集団は、児童の成長にとって重要な影響を及ぼす場である。児童は、ふれあいとぬくもりのある人間関係が築かれた学級集団の中において成長する。よい集団とは、一人一人の児童の個性が大切にされ、全員が目標を共有化していて、協同して取り組める集団である。そのような集団には、互いのよさを認め合う心理的な結び付きが強い支持的風土が醸成されている。児童は、その中で役割を果たしつつ、責任感を養い、所属感や所属意識、連帯感や連帯意識を育てていくことができる。

学級担任は、支持的な学級風土をもつ学級集団の育成に向けて、意図的・計画的に取り組を進めて行かなくてはならない。

#### **エ 家庭と連携した開かれた学級経営を展開する**

児童の規範意識や集団性が乏しくなっている要因として、大賀(2011)は、「保護者などの教育に対する価値観が多様化する傾向にあり、子どもの発達課題に対して、指導しておくべきこととそうでないことなどの基準がわかりにくくなっています。」と指摘している。

好ましい人間形成を図る学級集団をつくり上げるには、保護者と学級担任とが相互の立場を正しく理解して協力し合える信頼関係を築き、家庭と学校が本来備えている教育的機能を互いに発揮したり補い合ったりすることが必要である。そのためには、保護者との間で、学級通信や保護者会、家庭訪問などによる相互の交流を通して、学級集団育成に関して共通理解を図っておかなくてはならない。

### **(3) 学級集団育成に寄与する学級通信の役割**

#### **ア 学級経営方針と学級通信**

学級集団の育成においては、学級経営方針に対する児童・保護者の理解・協力が欠かせない。学級通信は、児童や保護者に学級経営方針を折に触れて伝える働きをもち、そのことで学級経営方針に沿った取組を継続・発展させやすくなる。また、学級集団を育成する上での課題を学級担任に気付かせ、改善の方法を示唆する働きもある。

学校行事や学級活動の事前・活動中・事後において、活動のねらいや経過、児童の変化や成長ぶり等を学級通信で紹介していくと、家庭や学級指導での話題になる。そのことによって、活動目標の共有化が進み、建設的な話合いが生まれたり、児童間の心理的な結び付きが強まったりすることが期待でき、学級集団の育成に役立つ。

さらに、学級通信は、学級集団育成の足跡となるので、児童や保護者にとっては活動や成

長の記録となり、学級担任にとっては集団育成の評価もできる実践記録となる。

## イ 児童理解と学級通信

学級担任は、日頃から児童の変化や課題などに敏感に反応し、臨機応変に指導方法を改善できる力量を養っておかなくてはならない。学級集団の育成には、学級の児童一人一人の実態を把握すること、すなわち、確かな児童理解が重要である。児童の様々な側面を捉えようとする姿勢、個性的な存在として理解しようとする姿勢、人間同士の触れ合いを大切にしようとする姿勢で接するとき、児童理解は深まる。

学級通信を発行するためにネタ探しのアンテナを張り巡らすことで、日頃から学校生活全体にわたってきめ細やかな児童観察を心がけることになり、学級通信の発行を継続していくことで、児童を捉える感覚が研ぎ澄まされていく。これらの生活や学習の実態を基に、児童への承認・支持・激励等を学級通信で発信することは、学級集団の育成にも効果的である。

## ウ 支持的な学級風土と学級通信

学級集団は学校生活の基盤であり、児童一人一人がかけがえのない存在として尊重され、信頼されていることが実感できる心の安定する場でなければならない。つまり、小学校においては、学級集団が一人一人の児童にとって心の安定する場になっているのか、自分の居場所があり所属感を実感できる場になっているのか、みんなから認められて自尊心が保てる場になっているのかということが、児童の自己実現を進める上で重要なことである。

例えば、特別活動において指導する学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事等における協力的な活動の取組は、連帯感を高め、人間的なふれあいを深めるとともに、集団に秩序を与え、集団の一員としての役割を果たそうとする態度の育成を助け、暴力行為、いじめ、不登校等の問題行動を未然に防止できる。学級通信によって、その目的、内容、指導経過、評価等を児童や保護者に分かりやすい言葉で伝えることは、個々の児童にとって「自分」が紹介され、認めてもらえたことが励みとなるだけでなく、自己存在感を実感できる支持的な学級風土を醸成することにつながり、児童相互に所属感や所属意識、連帯感や連帯意識を育むことになる。

また、児童相互や家庭での会話材料になるだけでなく、友達の言動を知ることにより、その意図について考え、互いの違いを受け止めることができるようになり、集団の質も高まっていく。

## エ 家庭との連携と学級通信

学級通信は、児童・保護者・学級担任の三者をつなぐコミュニケーションツールとなり、三者の強い信頼関係を築いたり、連携や協力を生み出したりする役割を果たす。

学級担任は、自分一人で学級経営を行うのではなく、学校内外の様々な人と信頼関係を築き、共通理解のもと連携・協力していく必要がある。学級で行われる教育活動の責任者は学級担任であるから、学級担任には専門家としての教育理念をはじめ、取組の内容や様子、児童の実態等を正確・適時に説明する責任がある。学級通信は、その説明責任を果たす有効な手段となることができる。また、児童のよさや成長の様子を学級通信で紹介することは、学級担任が児童や保護者に温かいメッセージを送る場となり、信頼関係を強めるプラスの効果が期待できる。

さらに、信頼は一方的な関係の中で生まれるのではなく、相互が役割を果たし、情報を発信し、受信し合う中で生まれる。学級通信の活用によって、学級担任と家庭の双方向の交流・

連携が可能となる。例えば、学校の教育活動全体を通して行われる道徳教育や道徳の時間の活動に見られる児童の様子を学級通信で取り上げることによって、日常生活における道徳的実践を家庭の協力を得て促し、充実させる教育効果が期待でき、学級担任と保護者の双方で児童の活動を支援したり励ましたりすることができる。また、児童にとっても、集団のまとまりを意識し、集団への所属感を高めることになり、学級集団の育成も一層推進されることになる。

#### **(4) 望ましい学級経営の具現化につながる学級通信作成の視点**

学級通信は、必ず発行しなければならないものではない。しかし、発行することによって教育活動が円滑に進め易くなり、望ましい学級経営の具現化につなげることができるものである。

学級通信の大きな役割は、児童・保護者・学級担任の三者をつなぐパイプ役となることである。特に学校と家庭とをつなぎ、双方のコミュニケーションを深め豊かにする役割をもっている。学級通信でコミュニケーションが成立するということは、学級担任の「報告」や「説明」にとどまらず、共に考え合ったり、共に学び合ったりする「対話」や「交流」が生まれてくることである。学級通信の記事が家庭での話題となり、また、学級指導での話題となることで、児童（学級集団）、保護者（家庭）、学級担任（学校）の間に触れ合いとぬくもりが生まれ、それぞれが心豊かになって成長する教育効果が期待できると共に、強い信頼関係が築かれ、学級集団の育成に大きく寄与することになる。

このようなことから学級通信の対象は、児童と保護者の双方である。児童と保護者が共に読み合う、話し合う、考え合うための場をつくりたい。また、毎日発行できなくてもよいが、学級経営の年間計画を見通しながら、学級集団育成の要点を押さえた話題をタイミングよく記事にして継続することを心がけたい。

以上のことを踏まえ、学級通信を何のために書くか（目的）、何を書くか（内容）、どのように書くか（発行計画・構成・配慮・工夫）を常に点検（評価・改善）して実践していく必要がある。こういった過程をおろそかにすれば、学級通信の発行は、労多くして功少なしくなってしまう可能性もある。

#### **ア 目的**

望ましい学級経営の具現化を目指し、学級通信を児童・保護者・学級担任のコミュニケーションの手段として活用する。

#### **イ 内容**

望ましい学級集団育成の要点「明確な学級経営方針・確かな児童理解・支持的な学級風土の醸成・家庭との連携」が、記事内容の基調にあるよう常に意識する。

#### **(7) 学級担任が「学級経営方針」に基づいて「自分」を書く**

学級経営方針に基づき、自らの教育に対する考えや人生観、児童・保護者への願い等を具体的に自分なりの表現で、また、共に歩む姿勢で書く。

#### **(イ) 学校行事、学級活動の取組を書く**

児童の集団における活動実態を生き生きと伝え、確かな児童理解に基づいた承認・支持・激励を書くことにより、支持的な学級風土の醸成を目指す。例えば、特別活動における取組のねらい、見所、集団の一員として活動する児童の様子、活動中の課題、感想、成果等を事前から事後にわたって書く。

#### **(ウ) 学習活動の様子を書く**

学級で重点的に取り組んでいる学習活動のねらいや進捗状況、取組の中での出来事、見通し、課題、感想、成果、作品等を記事にし、児童の成長が親子で実感できるように書く。また、児童のよりよい成長を願い、保護者と共に考え、支え合う姿勢で書く。

#### **(エ) 保護者の声、役立つ話題、学べる教育情報等を書く**

気軽に保護者から声を寄せてもらえる雰囲気をつくり、できる範囲で保護者の意見・感想・情報を出してもらおう。また、共に考える話題として教育に関する情報や課題を提供し、家庭と学校の双方向の交流・連携が図れるように書く。(別添資料「学級通信作成マニュアル 急がば回れ」「文例①」、「文例②」参照)

#### **ウ 記事内容の記述のポイント**

- 学級経営方針を明確に伝え、児童・保護者の理解・協力を得られるような記述をする。
- 確かな児童理解に基づき、強い信頼関係が築けるような記述をする。
- 支持的な学級風土を醸成し、児童が所属感・連帯感を実感できるような記述をする。
- 説明責任を果たし、保護者と連携した学級経営の推進に役立てるような記述をする。

#### **エ 発達段階を踏まえた配慮**

小学校では、発達の幅が大きいので、発達段階を踏まえた内容や記述が必要となる。特に1年生は、生活面、学習面にわたった細やかな内容や丁寧な記述によって、保護者の不安感を軽くすることに役立つ。

#### **オ 構成・工夫**

##### **(7) 紙面レイアウト**

学級通信は内容が重要であるのは言うまでもないが、読みやすく、分かりやすい紙面であるために、レイアウトにも配慮する必要がある。(別添資料「学級通信作成マニュアル 急がば回れ」「紙面レイアウトのツボを押さえよう」参照)

##### **(イ) 書き続けるための工夫**

- 学級経営に学級通信発行を位置付け、管理職・学年主任・同僚の理解を得ておく。また、助言も求めて共通理解を図る。
- 常にアンテナを張り巡らし、ネタの発見・取材を心がけ、メモに残す。  
(例) 朝の点呼で児童観察する、当番活動や休み時間を児童と共に過ごして言動を観察する、児童に学習活動の振り返りをさせる、放課後に一日を振り返り、児童の言動をメモに残していく等
- 学級経営の年間計画を見通し、学級集団育成の要点を押さえた話題をタイミングよく記事にして継続する。週2回、週3回、月3回等の発行の目安を決める。(別添資料「学級通信作成マニュアル 急がば回れ」「学級経営を見通した記事ネタの例」参照)

#### **カ 点検・評価**

児童、保護者、教員の反応を確かめ、望ましい学級経営の具現化に学級通信発行が役立っているかを振り返り、点検、評価、改善をしていかななくてはならない。そのために、自分なりのチェック表を作るのも効果的である。(別添資料「学級通信作成マニュアル 急がば回れ」、「印刷前に！『急がば回れ』チェック10」・「発行後に！『楽しみながら取り組もう』チェック5」参照)

## 5 考えられる成果と提案

### (1) 学級経営と学級通信

今後、核家族化や都市化の進行といった社会やライフスタイルの変容を背景に、児童はもとより保護者や地域から、学校教育に対する様々な要請が増えることが予想され、学校経営や学年・学級経営に一層期待が寄せられることになる。そこでは、魅力ある学校や学年・学級づくりのために組織力を高めることや、教員の資質向上が不可欠であり、教育活動における説明責任を果たすことがとても重要なこととなる。児童・保護者・学級担任の三者をつなぐコミュニケーションツールとなる学級通信は、四つの面で効果があると考えられる。以下に、学級通信を活用することで得られるであろう四つの効果をまとめる。

- 明確な学級経営方針のもとに展開される集団育成の状況や展望だけでなく、学級担任の生き方や考え方、教育観等を率直に発信することで、児童や保護者との間に信頼関係が築かれ安心感も生まれる。また、学級経営方針に沿った取組について発信を継続することは、児童や保護者、学級担任のそれぞれの願いが一つの方向に向けられ、学級集団の育成を助けることとなる。
- 望ましい学級集団の育成には、児童理解が欠かせない。学級集団の育成を進める中で、「児童が何を考えているのか分からない」と言う前に、学級担任が児童の思いや背景を共感的に理解しようとする姿勢になっているかを反省しなくてはならない。学級通信のネタを求めてアンテナを張り巡らすことは、児童と共に過ごす中で一人一人の個性を認めるきめ細やかな児童観察力を身に付けることになり、児童理解を確かなものにしていくことができる。
- 学級集団では、一人一人の自発的な思いや願いが尊重され、互いの心理的な結び付きを深めた支持的風土の醸成によって児童の人間関係を向上させ、互いの間に所属感や所属意識、連帯感や連帯意識を育てていくことができる。学級通信は、支持的風土の醸成に寄与し、児童一人一人がかけがえのない存在として尊重され認められていることを実感させる働きをもっている。
- 保護者へのアプローチは、教員が家庭内に立ち入るというスタンスでなく、児童の健全な成長を促すための双方向の連携・協力がねらいである。学級通信を保護者への説明責任を果たす情報発信の手段として活用することで、家庭とのより強い連携が生まれ、集団育成への協力が得やすくなる。また、児童の実態をきめ細やかに把握できる機会も生まれる。各家庭とつながるネットワークで児童の成長を支えていくことが、今後の学級経営の在り方として特に重要である。

学級通信を発行するにあたり、「生徒指導や教材研究、学級事務や校務分掌と多忙な中で、学級通信の発行が負担になるのではないか」という意見を耳にする。確かに日々の業務に追われ、学級通信を書く時間がない場合もある。しかし、学級通信を発行することによって、学年主任や同僚から学級経営についてアドバイスをもらったり、児童や保護者との信頼関係・協力関係が深まったりして、トラブルの発生や拡大を未然に防ぐ効果が期待できることは見逃せない。一方、配慮を欠いた学級通信は、信頼や理解、協力を得られず、かえって集団育成への阻害要因になりかねないので、管理職や学年主任の助言を謙虚に求めることを忘れてはならない。

学級経営に近道はない。学級集団育成の要点を押さえた学級通信の発行は、遠回りのよう



であるが、「急がば回れ」の諺のように、望ましい学級経営の具現化につながる着実な手段ではないかと考える。

## (2) 「開かれた学級通信」への提案

「開かれた学級通信」とは、学級通信を通して個々の学級担任の学級経営をオープンにすることである。学級経営についての情報共有と連携、指導と支援がスムーズに行われること、また、学級担任が互いに切磋琢磨し教員としての資質向上を図りながら、学校として一枚岩となる強力な組織体制を整えることを目指している。

### ア 学級通信を教職員間で回覧後、学級通信ファイルを作成して職員室に保管し、いつでも誰でも参照できるようにしておく。

学級通信ファイルの作成は、若手、新任教員が必要とされる学級経営の知識とスキルを向上させていくための参考になるとともに、取組についての助言をもらうことを可能にする。また、個々の学級担任の取組が明らかとなり、互いに支援し合ったり連携したりして効果的に取組を進めるだけでなく、個々の学級経営の取組を工夫・発展させたり、全校的な取組に広げたりすることも可能となる。さらに、担当学年以外の取組を閲覧することが可能なので、前年度の実践の裏付けのもとに積み重ねた計画と指導が可能となり、学級経営の継続性・合理性の点から見ても有効である。

少子化傾向の中、奈良県下においては、単学級の学年が増加している。学年で学級経営に関して相談できない状況でも、他の教員の学級通信を参考にすることができると、学級経営にプラスの効果をもたらすのではないかと考える。

### イ 学年会で学級通信の内容を取り上げ、互いの学級経営の交流を行う。

児童一人一人への具体的な教育的指導は、細やかな個人情報をもつ学級担任の責任において行われるのが基本である。しかし、教職員が学級通信をもとにして学級担任の考え方や指導法、並びに学級の実態情報を交流することにより、協働した児童への指導・支援を行うことにつながる。学級経営の諸問題の全てが学級内で解決されるものではない。また、その諸問題は、学級内のみで起こるものでもない。学級経営は学級担任が中心に行うものであるが、児童への指導・支援は学年や専科の教員、ひいては教職員全体で行っていかねばならない。また、教科担任制や、交換授業・合同授業が意図的、計画的に実践されている今日、学校・学年・学級経営の在り方も見直されていくべきである。

今後の学校教育は、各教員が互いの専門性を生かしたり、ウィークポイントを補ったりして、チームとして行動・対応していくことが必要である。学級担任が「学年担任」の視野に立って「学年経営」を展開していくために、望ましい学級経営の具現化につながる学級通信作成の視点を「学年通信」に取り入れていけば、教育効果も一層期待できると考える。

## 6 おわりに

望ましい学級経営を具現化する取組は、様々なものが創意工夫でき、アイディアや方策は無限である。特別活動や道徳教育は、学級集団の育成には欠かせないものであり、各教科等の指導においても学級担任の個性を生かした様々な取組が考案できよう。そのような取組と相乗効果をもたらし、望ましい学級経営の道を拓く役割をもつのが学級通信である。

学級経営に行き詰まりを感じ取組を模索している学級担任の方々に、学級集団育成の要点を押さえた学級通信の発行を勧めたい。「学級通信マニュアル 急がば回れ」を活用していただ

き、学級通信の日々創造と改善を楽しみながら、望ましい学級経営の具現化につなげていただきたい。

#### 参考・引用文献

- (1) 河村茂雄 (2010) 『日本の学級集団と学級経営』 図書文化 p. 23、 p. 59、 p. 145、 p. 235
- (2) ベネッセ教育研究所 『『学校の荒れ』をどうとらえるか-教師調査から-表15教師の悩み』  
モノグラフ・小学生ナウ (1999) VOL. 19-2 <http://www.crn.or.jp/LIBRARY/SYOU/VOL192/GIF/S2192016.PDF>
- (3) 世界日報 教育ニュース (2005. 5. 30)  
<http://www.worldtimes.co.jp/wtop/education/news/050530.html>
- (4) 中央教育審議会 (1998) 『『新しい時代を拓く心を育てるために』 一次世代を育てる心を失う危機ー』 (答申)
- (5) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領』
- (6) 杉田 洋 (2011) 「学級集団育成上の課題と方策」 『初等教育資料』 no. 873東洋館出版社  
p. 7
- (7) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説総則編』 東洋館出版社 p. 57-58
- (8) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説特別活動編』 東洋館出版社 p. 9
- (9) 遠藤知恵・大賀英之 (2011) 「子どもが育つ学級集団の育成」 『初等教育資料』 no. 873東洋館出版社 p. 36
- (10) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説道徳編』 東洋館出版社
- (11) 理想教育財団 (2007) 『通信づくりハンドブック』
- (12) 理想教育財団 (2009) 『通信づくりの知恵袋』